



神奈川大学特別招聘教授
名古屋大学名誉教授

安彦忠彦

あびこ・ただひこ●1942年生まれ。東京大学教育学部卒業。同大学大学院教育学研究科博士課程1年中退。大阪大学助手、愛知教育大学助教授、名古屋大学教授、早稲田大学教育総合科学術院特任教授を経て、2012年より現職。この間、名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長、同大学教育学部長などを歴任。博士(教育学)。中央教育審議会正委員、臨時委員として、2003年の前回学習指導要領の一部改正、2008-9年告示の現行学習指導要領の全面改訂に関わるとともに、次期学習指導要領に向けた改訂のための有識者会議の座長を務める。専門はカリキュラム論、教育方法、教育評価。

Interview

自立した 人格の形成なくして 何のための教師か

中央教育審議会委員として3回に及ぶ学習指導要領改訂に携わってきた

神奈川大学特別招聘教授、名古屋大学名誉教授の安彦忠彦氏。

矢継ぎ早に進む教育改革における留意点とともに

教師としての心構えについて、思いのたけを語っていただきました。

重視すべきは、「能力」ではなく 「人格や人間性」に関わる「資質」

平成18年(2006年)に改正された教育基本法において、教育の目的は次のように改められました。

——教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。(傍点は編集部)

本来「資質」とは、生まれもった性質のことですが、育成とある以上、育てられるものとして広義に捉える必要があります。社会の形成者として必

要な資質であり、かつ教育で育てられるものは何かと言えば、まさに人格であり人間性だと思っております。

ところが、コンピテンシーという言葉が経済界で使われ始め、教育の文脈でも「資質能力」と二括りで使われだすようになると、人格や人間性に関わる「資質」よりも、思考力や問題解決力など「○○力」として表されるような「能力」ばかりに重きが置かれるようになりました。より正確に言うると、本来「資質」に関わる部分が、「能力」の一部として論じられるようになってきたのです。

そうした傾向は極端に言えば、「能



力」はあるものの人格的に未熟な人間が育つていいのか、という批判を呼ぶことになるでしょう。教科の専門家としていくら能力があっても、信用ならない教師に、子どもが尊敬の念を抱かないように、能力以前に、信用という資質がなければ人間関係が成り立たないのはどこの世界も同じです。

能力重視の流れはまた、コンピテンシーが経済的な文脈から出てきた言葉であることから考えて、結局は質の高い労働者としての能力育成のみに傾きかねない危険性もはらんでいます。それではいけないと、議論の過程で「資質・能力」と両者を区別するようにしたわけですが、基本的な流れは変わっていない気がします。

私が、特に危機感を抱いたのは、現行の高等学校学習指導要領(2009年告示)における中央教育審議会での議論の際、文部科学省作成の文案に「人材」という言葉が出てきた時です。高等教育ならわかります。でも、高校生を人材という視点で捉えることに違和感を抱きました。

能力ばかりが取り上げられ、それを何のために使うのかという、主体の側の自立した価値観が軽視されたとしたら何の意味があるでしょう。「人に言われたからやります」ではロボットと同じ。それこそ都合のいい人材と

して利用されるだけです。

誤解のないよう強調しておきますが、「能力」を身につける必要性は認めています。産業界からの要請だとしても、コンピテンシー自身を否定するつもりはありません。複雑な現代社会に適応するためにも、正解のない問題の解決に向きあうためにも、等しく育成しておく必要があると思います。だからこそ、その能力を主体的

に生かす「自立した人格」の育成も忘れてはならないと言いたいのです。そうでないと、自らの将来を決める責任ある主権者は生まれません。「人材」育成は訓練で可能ですが、「人格・人物」の育成は教育でしかできません。その教育を担う教師が、単に教科を教えるだけではなく、教科を通じて、人としての在り方や生き方まで教える。フランスの哲学者ギユスドルフは『何のための教師』(みすず書房)という著

書で、「学校は人格が教化される場所」「教師は教え授けるが、しかし教え授けるものとは別のものを授ける」と記しています。人格という目に見えないものを育むことの教育的価値は、多くの先人が伝えているところです。

**経済的・社会的自立より大切な
依存性の発達による精神的自立**

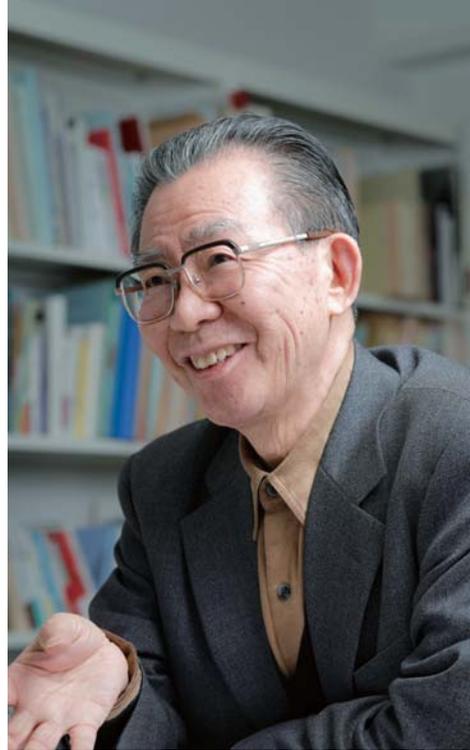
先ほどから「自立」という言葉を

使っていますが、自立と言ったとき、多くの方が頭に浮かべるのは経済的自立、社会的自立かもしれません。しかし、より大事なのは精神的自立です。誰かに依存し、その権威を借りるのではなく、自らの意見をもつこと。もちろん、人間は、他者への依存を完全に断つことなどできません。しかし、母親や兄弟から始まり、友人や教師、思想家、さらには宗教に至るまで、依存の対象や質を変化させていくことはできます。すなわち、単一のものから複数のものへ、直接的なものから間接的なものへ、具体的なものから抽象的なものへ。そうやって依存性を発達させていくなかで、国や社会からの要請を対象化し、自分で分析・吟味し、望ましくない点があれば改善していく。そうした能力と自由を身に付けることが、精神的に自立しているということなのです。

その点、「出藍の誉れ」という故事成語は、教育の本質を端的に表している言葉だと思います。「青は藍より出でて藍より青し」と言われるように、古い世代に育てられながらも、若い世代が、大人の描く価値観を乗り越えて成長し、精神的に自立し、自らが求める社会を自分たちで決めるようになる。そのことを古い世代も、自らの誇りとする。それこそ、社会の望ま

社会を対象化し、吟味批判し改善する。
未来の国を担う責任ある主権者を
育むことこそ教育の目的であり価値





先生は人生のモデルであり、活動自体がカリキュラム。教師としての矜持をもつて

しい発展であり進歩。教育者としての醍醐味もそこにあると思います。

生き方のモデルとして自立した姿を見せてほしい

では、自立心を養うために、学校現場では何をすべきでしょうか。第一は、これまでよく見られたように子どもたちを客体ではなく、主体として扱う場面を増やすことです。誰かに指示され、決められ、評価されるばかりではなく、自分で考え、決断し、評価する機会を増やす。

そういう点では、アクティブラーニングやPBL、探究学習などは、学習の在り方として望ましいことだと思えます。ただ、その際、教師に促されるままに、受け身的に授業が展開されるという意味がありません。生徒のもつ潜在的な能力が、より能動的に発揮できるような自由な場を保障すること

が教師の役割だと思っています。

もう一点、子どもの自立を促す効果的な方法は、先生自身が自立した姿を見せることです。教師が、きちんとものを考え、自分の言葉で語る姿を見たとき、子どもたちは「あのようにならなくては」と思えるのです。

やはり、生徒にとって先生は、人生の先輩としてのモデル。学ぶべきものを体現しているという点で、先生の活動そのものがカリキュラムなのだと言っていると思います。

取り巻く問題が多いからこそ教師としての力量を示して

かつてと比べ、教師に対する視線が厳しいことや、教師が置かれた立場が弱いことはよく理解しています。

例えば、保護者も含めて社会全体が高学歴化するなか、相対的に教師の社会的地位が低下していることは事

実です。人物本位ではなく、学歴を

物差しに人を判断する多くの親の意識こそ改善されるべきですが、現実には親が尊敬していない教師を、子どもが尊敬するとは思えません。今後一層、教員養成の在り方が議論されるべきです。

また、責任をすべて学校に押しつける保護者や社会の意識も問題です。本当は親にしてもらいたいこと、叱ってほしいことを、学校の先生が子どもにとつてありがたいのは半減。公教育以上に私教育に対する手当てを厚くし、双方の連携が図られるべきだと思います。

このような、一教員では如何ともしがたい社会構造があるわけですが、状況を少しでも好転させるためにも、まずは先生方一人ひとりが教師としての自覚や矜持をもつこと。繰り返しますが、少なくとも、周りに唯々諾々と

従い、簡単に意見を変えるような教師を子どもは尊敬しません。

反対に、学校や地域が抱えているさまざまな問題に対峙して、保護者や社会をハッとさせるような成果を上げている例も少なくありません。ある中学校で校医を務めていた医師の話です。「自分は、教員というのは誰にでもできるものだと思っていた。ところが、学校が荒れていたとき、新しい校長がやつてきて、一年間で静かな良い学校に変えたのを見て、これは誰にでもできることではない、と教員の専門性を認めざるをえなかった」

こういう力量を示してこそ、教育者としての尊敬が得られると思います。今後は、自らそうしたモデルとなつて、社会全体の雰囲気を変える役割も果たしてほしいと思います

複雑で厳しさを増す社会。そうした認識自体が問われる

先生方に元気を与え、励ましたいのは山々ですが、教育を論じることが空しくなるような世相ないし政策の渦中にあることを実感している私としては、未来に「希望」が開けていると安易に言うことはできません。

特に、今の若い人たちは、権力のもつネガティブな部分に無自覚であり、政治や社会問題に対して、おかしいこ



図1 ESDとは?

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

ESDの実施には、特に次の二つの観点が必要です。

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと

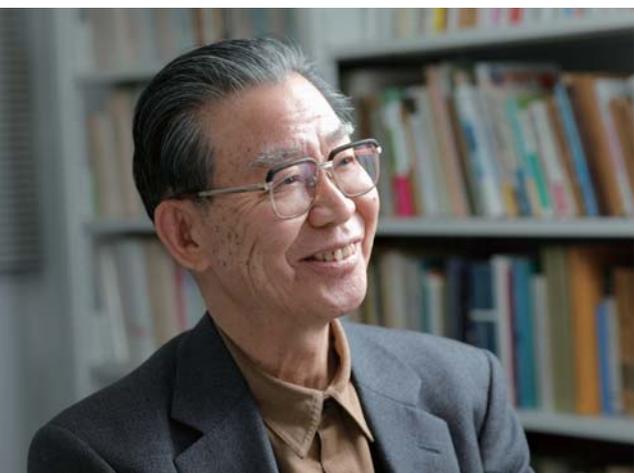
そのため、環境、平和や人権等のESDの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要です。

※文部科学省ホームページより
http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm

とをおかしいと声を上げません。そういう無気力な態度は、かつて多くの日本人が国や軍に依存してきたことと変わらないと思うのです。
だからこそ、教師一人ひとりが、非常に複雑で、厳しい社会状況にあるという認識に立ち、そうした社会に覚悟をもつて向き合う姿を見せるべきなのです。さまざまな圧力に対しても、うまく耐え、感情的にならず、知性・理性を働かせながら、生徒の将来にとつて望ましいことは何かを深く考え、他者や社会に対して表明する。

自分、のほほんと暮らしながら生徒に「お前ら、がんばれよ」では余りに無責任。「俺も模範を示す立場としてがんばるから、君たちも本気になる」と道を示さなくてはいけません。学習指導要領も大学入試も変わります。その流れのなかで、もしも私の懸念通り、ただ能力だけが重視され、経済的な豊かさを追うだけの教育に変わってしまうとしたら、子どもたちはむしろ不幸になるでしょう。
しかし、そうした能力に人格・人間性が伴い、環境やエネルギー問題のほか、地球規模の諸課題に立ち向かうために生かされるのであれば、大いに期待はもてます。自分たちの利害だけを主張しあい、国民国家レベルの話で済む時代は終わりました。今、大勢のボランティアやNPOが取り組んでいる国や地域の枠を越えた活動のなかには、目を見開かされるものが無

数にあります。若い人の良さとしてしばしば話題にあがる優しさや繊細さ。そういったものが国境を越えて広がっていく余地はたくさんあるのです。
次期学習指導要領に向けた改訂のための有識者会議などで、私が一番強く求めてきたのがESD。持続可能な開発(発展)のための教育(図1)でした。世界的な視野や地球環境への関心など、広く深く深いところに意識が向かないのであれば、教育の意味はないと思っています。
教師一人ひとりが、「未来の国の主権者」である子どもを立場を代弁する視点に断固として立つ。そうした動機になったとき、希望は生まれると思っています。



安易に「希望」と言えない時代。
それでも、社会的文脈や
地球環境への関心を育むことで
生徒の未来へ希望をつなぎたい

